

チョコレートやワッフルなど、
おいしいお菓子の国として
世界的に有名なベルギー王国の中でも、
特に権威のある「ヴィタメル」社。

1910年創業――

ベルギー王室の特別なパーティや、

結婚式には、必ず「ヴィタメル」社の

お菓子が提供されてきた。

世界のチョコレートを集めたガイドブック

「THE CHOCOLATE COMPANION」
では最高の三つ星を冠している。



比屋根毅は、

長い間あこがれ続けたこの老舗ブランドと、

ついに提携し「ヴィタメル・ジャポン」を設立した。

それは、二人の経営者の、菓子づくりへの

情熱が結びつけたものであった。

情熱の洋菓子職人

The artisan spirits ~Tsuyoshi Hiyane Story~

比屋根毅物語

〈第十一話〉

漫画：佐藤晴美

(大手前大学 メディア・芸術学部 講師)

1987年
ビタミンールベルギー本社

こんにちは
ムッシュ・ビタミンール
お忙しいところ
お会いできて
大変光栄です

ビタミンール社社長(当時)
アンリ・ギヌター・ヴ・ビタミンール

ええ
ムッシュ・ヒヤネ

ワールドケーキフェアでの
グランプリ受賞
おめでとう





あちらが
焼成のセクション

こちらが仕上げの
セクションです

穀は足が
ふるえた。

そこへの立ち入りを
許されたのだ

ヴィタメール社の工場は
部外者の見学などは
一切禁止の姿勢をとっていた

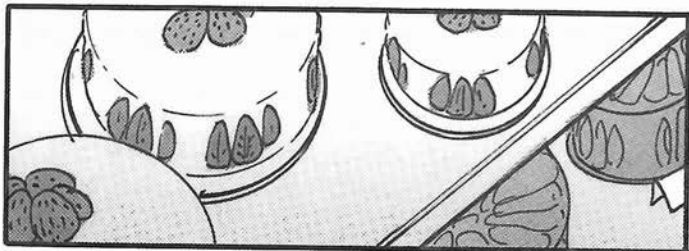
— よろしければ
ムッシュ
我が社の工場を
ご覧になりませんか

え?!

工場内はちりつなく、
働く人々やラインは
整然としていた。
名門の誇りを、
その工場内でも
感じとることができた。

ムッシュ・ヒヤネ
私たちの出会いは
重要な意味を
持つことに
なるかもしれない







vitaméールのチョコレートが
いかなるこだわりを持ち、
職人たちが誇りを持って
作り出しているのか—
そのことを日本人に
知ってもらうのには、
まだ時間がかかります



ムッシュ

vitaméール・ジャポンの
第一号店ですが
依然赤字続きです

ウム



ありがとう
ムッシュ!

…よくわかった
経営が軌道に
乗るまで
ロイヤリティを下げましょう



でも必ず、そんな日が
来ると思うんです
今は、しっかりと
基礎を固めるときです

そのために…
ムッシュ、
非常に心苦しいのですが、
ロイヤリティを
下げていただけませんか—
少しでも赤字を
減らしたいんです

穀はヴィタメールに職人を派遣し、
技術を学ばせることはもちろん、
日本人の好みにあわせて
商品を改良するなど
さまざまな試行錯誤が繰り返された。

ケーキの大きさが
日本人にとっては
大きすぎるのでは
ないでしょうか

なるほど

甘さを少しだけ
抑えた方が
日本人の口に
合うようです

すぐ
作ってみよう
じゃないか

日本の売り場に関しては
ムッシュ・ヒヤネに
すべてまかせて
いるんだよ

それらは、すべて
ムッシュ・ヴィタメールと、
比屋根穀との
信頼関係が
あつてこそのことだった。

そして、ヴィタメール本社に
派遣された技術者たちも、
めきめきと力をつけていった。

現在、ヴィタメールは
全国に15の店舗を設けており、
もともと成功した洋菓子の
海外ブランドのひとつとして
高い評価をうけている。

ここまで来るのに
20年近くかかったんだ
長い時間をかけて
人を育て、
店を育てたんだよ

でも手仕事と
手づくりの精神だけは
変えなかった

良いものは
必ず売れると
信じてきた

2006年、
アンリ・ヴィタメール氏は、
息子のポール氏、娘のミリアムさん、
そして妻である
イヴ・オンヌさんとともに、
穀を呼び、こう言った。

ムッシュ・ヒヤネ
きみにヴィタメール社への
経営参画をお願いしたい

!

ヴィタメール氏が
深く信頼を
寄せてくれていたことに、
毅はとても驚き、
感動を覚えた。



毅はポール氏、
ミリアムさんと
ともにがっしりと
握手を交わした。



昨年、ヴィタメール氏は
91歳でこの世を去った。
王室関係者も参列する、
一流ブランド「ヴィタメール」
オーナーの葬儀で、
毅はファミリーの一員として
弔辞を述べた。

「伝統を大切に、
味にこだわった菓子作り」、
毅はその誓いを、
ヴィタメール氏の墓前に捧げた。

続

続子安

出石アカル

絵 菅原洸人
題字 六車明峰

前号の続き、川見こやすさんの話である。

* *

それまでわたしは、自分の境遇をだれにも聞けなかつてん。うすうすなんかおかしいとは思ってんけど、これは聞いたらあかんことやと思てた。よし子姉ちゃんは、わたしに意地悪のつもりではなかつたんよ。可愛がつてくれてはった。わたしがなんにも知らんのが可哀想やと思たらしい。ほんで、ある夜、並んで寝てる布団の中で教えてくれる。はってん。

わたしを生んだ人は、淡路島にいてはるて。それで解つてん。時々松山の家に来てはった淡路島の親戚のおじさんが、わたしに優しくしてくれてはった。「こやす、こやす」ゆうて、呼び捨てにしなから小遣いをくれたりしてね。なんでそんなに優し

くしてくれはるんやろと思ててんけど、その人が実は父親やつてん。

よし子姉ちゃんの話聞いてたら、天井の模様が滲んできて、わたし布団の中にもぐりこんだ。別に悲しかったわけやないんやけど、なんかしらん涙が止まらないようになってしもた。よし子姉ちゃんは悪いことないんやけど、「かんにん、かんにん」て言わはった。

そらね、やつぱり実の親とちゃうから、遠慮が無かつたと言つたら嘘になるし、悲しいことが無かつたわけやないけど、それはいちいち言いたくないねん。ただ、わたしを生んだ人には「人にやるくらいやつたら、生まんとつてくれたらよかったのに」とは思つたよ。

わたしの名前は「こやす」です。親がつけてくれた名前とちがつて、これは別の叔母さんがつけてくれたらしいの。子安地蔵に因んでね。だけどわたしは漢字で「小安」と思ててん。だれにそう教えてもらったか覚えてないけど、そう信じててん。だから、ずっと学校でもどこでも小安で書いてた。それで通つててん。後に結婚する時になって戸籍謄本見たら、平仮名の「こやす」やつてんやん。わたしはほんまに自分のことなんにも知らんかつたんですよ。

わたし、高校には行つてません。中学出てすぐに働きました。

初めて給料もらつて、自分の好きな物を買つて食べられた時、「ああ、幸せやなあ」て心から思た。それから、料理・和裁・生け花・お茶やいろいろな習い事を次から次にやつたんよ。

結婚は昭和43年。25歳の時やつた。紹介してくれはる人があつてその人と会つたんやけど、なんか話が合わなくて一度は断つたんよ。だけど縁があつたんやね。結婚してしまいました。今の主人です。

でもすぐに「しまった」と思たんよ。だつて、新婚旅行の車中で、「ぼく、借金ある」て言わはつてんもん。結婚式費用や所帯持つたためのお金もみな借金してはつてん。だから、新婚早々から、借金払いやつた。

しかも主人は酒を飲んだら人が変わつてね。そろひどかつたんやから。時には仲人さんのとこに逃げたりして……。だけどわたしには帰るとこなかつたからねえ。ほんで、二回毒を服んだ。でも助かつてしもてん。死ねなかつたんよ。不思議やつた。だけども思ひ当てることあるの。主人のお父さんは主人の三才の時に亡くなつてはるんやけどね、わたしはその仏さんを大事に祀つててね、お供へしたご飯を下げた時、いつもわたしがいただいてたの。だからそれが毒消しになつて助



けられたと思うんよ。

わたしを生んだ人に初めて会つたのは、わたしが始めての子を生んだ時。見に来はつた。わたしにそつくりの人やつた。気持ち悪いくらいにそつくりやつた。けどちつとも情がわかへんかつた。「お母ちゃん」とは呼べなかつてん。呼ぼうとも思わなかつた。

その後、何年も会うことはなかつた。ところが、淡路の実家で結婚式があつた時に呼ばれてね、二人の子どもと一緒に一家四人で初めて行つたんよ。だけど、親や親戚や言われてもわたしはやつぱりちつとも情がわかへん。何も話すことが無くて間が悪くてね、困つた。そんなわたしを見て主人がね、「お母さんに話をしたげんかえつ！」て怒つてね、だけど、共通の話題は無いし、いい思い出も無いし、何を喋らんよねえ。そんなわたしの態度に、わたしを生んだ人も間が悪そうにしてはるだけやつた。

わたしね、今にして思うねん。やつぱり生きて来て良かったな、て。だつて自分の子ども二人を自分で育てられたんよ、自分で。

■出石アカルいずしあかる(一九四三年兵庫県生まれ)『風媒花』『火曜日』同人、兵庫県現代詩協会会員、詩集『コトヘカブの耳』編集工房ノア刊にて二〇〇二年度第三十回フルメール賞文学部門受賞。

《神戸異人館物語》

夜明けの

ハンター



ハンター肖像

永遠の惜別

明治十六年の初冬の大气が静かに兵庫を包んでいた。が、その静寂が一発の銃声によって打ち破られてしまったのである。つい先日、キルビーと出かけた布引の滝。そこから流れ落ちる水がまっすぐ南に下って、大阪湾に注ぐ新生田川の河口にある小野浜造船所で、雑用をしていた志津が突如、轟音を聞いた。耳を激しくつんざくような鋭いその音は志津にとって初めて体験する音であった。



三条杜夫
絵・谷口和市

「キヤア！」

思わず驚きの声を上げると、手にしていた皿を土間に落とすのと同時にであった。皿が割れるのにもかまっていられず、志津は音のした方へと駆けて行つた。事務所を出たところで、キルビーが倒れていた。

「あなた！」

志津がかがみ込んでキルビーの upper bodyを抱える。

キルビーの右手に拳銃が握られている。今しがた志津が聞いたのはキルビーが自分のこめかみに撃ち込んだ拳銃の音であった。血が流れ出しており、みるみる志津の着物を赤く染めていく。

「誰か！ 誰か来て下さい！」

作業場の方に向かって大きな声で呼んでおいて志津はキルビーの体をゆさぶる。

「あなた！」

後は言葉にならない。キルビーはすでにぐったりしている。

「あなた！」

キルビーは虫の息だ。が、志津の呼びかけによりやく、かすかに反応を示した。拳銃を地面に置き、その手を志津が握る。

「何故？ こんなことを？」

「・・・志津・・・ソーリー・・・」

それだけ言うのがやつとだった。作業場から駆けつけた従業員たちが遠巻きにキルビーと志津を見守る。

「血を、血を止めて！」

志津の叫びに、従業員たちが、あわてて手ぬぐいを見つけるなどして、キルビーのそばに駆け寄る。作業長が率先して、キルビーの手当をする。

「救急袋！」

「はい。ここに！」

キルビーの額に手ぬぐいを巻くのが精一杯で、薬を塗りつけて対処出来る程度傷ではない。ぐるぐる巻きにした手ぬぐいが鮮血に染まる。

「あなた！」

キルビーの upper body を抱えて自らの膝で支えて、志

津がキルビーの意識を取り戻そうと必死に呼びかける。

「・・・志津・・・」

あとはかすかなうめき声。言葉にはならない。うすれゆく意識のなかで、キルビーがうつろなまなざしで見ているものは、子供のころの自分の姿であった。アイルランドの春である。遠くに海が見える丘の上に白い花が咲き乱れている。一面の花畑の中を男の子が駆けている。離れたところで両手を広げて待ち受けている女性がいる。

「ママ・・・！」

女性がにこやかに笑っているのに、近づけない。海が近づいて来て、嵐のなかを帆船が行く。大波の向こうから女性の呼ぶ声が聞こえる。

「あなた！」

志津の声であった。うつろなまなざしの中に、ぼんやりと見えるのは志津の顔である。

「サンキュ・・・」

それだけ言うのがやつとだった。かすかな記憶の向こうに、大名行列供割り事件しよわの責任を取って腹切りをした侍のシルエットがかすかに浮かんでくる。それがずっと消えたのは、鋭い鳥の鳴き声にしたからである。百舌もずの声である。つい先日、志津と二人で聞いた百舌の声。「百舌のいけにえ」と言う狩りをする鳥であるということに興味を持ったキルビーであった。布引の滝で楽しい時間を過ごし、気分転換をはかって今後への意欲を新たにたくわえたはずであった。そのキルビーが思いがけない行動に出た。まさに寝耳に水の志津であった。

「志津……サンキュー……」

もはや虫の息で、それだけ言うのがやつとのキルビーである。異国の地で、四十数年の生涯を、閉じようとしている。彼が拳銃を持っていたことには全く気付いていない志津であつた。まさか、拳銃でこうして自殺することなど、志津も従業員の誰もが想像だに出来ないことであつた。積極性に富むキルビーが、英国を離れて日本に来て、目を見晴らせるような活動を展開してきた。最近はそのことが思わしくなく、苦境に立たされる毎日であつたことは志津にも痛いほどよく分かつていた。だからこそ、せめて精神的にそんな彼を一生懸命に支えてきた志津であつた。が、こんな形で終焉を迎えようとは。悲し過ぎる現実であつた。志津の涙がキルビーの頬に落ちた。志津の鳴咽が始まつた。二人を取り囲む従業員たちもまた、男泣きするのであつた。

大阪で、ハンターが愛子と共に、門田三郎兵衛宅を訪ねるべく、歩いている時、思いがけなく、愛子の下駄の鼻緒が切れた。一瞬、二人の間に悪い予感のような思いが走つた。

「心配要ラナイ。下駄ノ鼻緒ハ切レルノ当たり前デス。切レタ鼻緒ハ結ベバイイ」

と愛子を慰めるハンター自身、何かわからぬままに胸騒ぎがした。持ち合わせていた手ぬぐいを切り裂いて、鼻緒の応急処置をして、とりあえずは、門田宅までたどり着いた二人であつた。いつもと変わらぬやさしい門田の迎えに、ハンターも愛子も、ほっと胸を撫でおろすのであつたが、ちょうどそのころ、兵庫の小野浜造船所で、キルビー

が、拳銃自殺をとげていたのである。二人がそのことを知るのは、翌日のことである。

小野浜造船所の従業員が、汽車で大阪鉄工所へ駆けつけて来た。アメリカでアレキサンダー・グラハム・ベルが電話を発明したのは1876年、明治九年。その翌年にはアメリカの電話輸出第一号機が日本に輸入されてはいた。この電話機を使つて赤坂の工部省と宮内省との間、二キロメートルで試験を行い、明治十一年には国産電話機を完成させ、日本に電話を普及させる準備に着手してはいた。しかし、電話事業が公にスタートするのは明治二十二年の東京―熱海間の一回線のみで、通信省が一般に電話加入者募集を行うのは同二十三年のことである。この明治十六年現在の七年後のことであるから、この時点では、一大事を知らせるには汽車に乗つて知らせに行くのが一番でつとり早い手段であつた。

「キルビー社長が昨日、拳銃自殺しました」

従業員がハンターの姿を見るなり、報告する。ハンターの顔からさつと血の気が引く。

「ソレハ本当デスカ？」

信じられない思いのハンターであつた。

「愛子！ キルビーサンが大変ダ！」

すぐに愛子と呼ぶ。

「小野浜へ行コウ」

取る物も取り合わず、バタバタと出かける準備を整える。

「アナタ、一緒ニお願いシマス」

キルビーの従業員と共に、梅田から三ノ宮までの車中の人となり、道すがらキルビーの様子を聞

き出すハンターと愛子であった。

小野浜造船所の事務所にキルビーの遺体が安置されていた。その前で志津がハンターと愛子を迎えた。愛子がそとと駆け寄るのと、志津が愛子の胸に顔をうずめるのと同時であった。愛子は黙って志津の肩に手を置くと、その手をやさしく上下に動かしながら、志津にささやいた。

「どう言っているのか・・・わからない」

志津は泣くだけである。ハンターは従業員に案内されてキルビーの遺体のそばに近づく。白い布をめくってキルビーの顔を見る。安らかな眠り顔にこめかみの傷が痛々しい。

「キルビーサン！」

あとは言葉にならない。ハンターは上半身を折ってどどつとキルビーのそばにうずくまる。そつとキルビーの顔を撫でる。冬の天気と同じほどに冷たい。確かに、これまでのキルビーではない。まぎれもなく、命を捨てたキルビーである。ハンターの目に涙があふれてきた。ぬぐうこともままならず、その涙がキルビーの顔にしたたり落ちる。

「ク、ク、ク・・・」

ハンターが嗚咽する。生まれ故郷をあとに日本に来て、ずっと世話になり続けてきた恩人のキルビーである。故国で過ごした時間よりこの日本で過ごす時間の方が長くなった自分の生きざまに大きな影響をもたらせ続けてきた真正正銘の恩人である。この人との付き合いは何があろうとも生涯続くものと思っていた。いや、確かに、キルビーが死ぬまで付き合いは続いた。だが、思いもかけず、キルビーがこんなにも早く自らの命を絶とうと

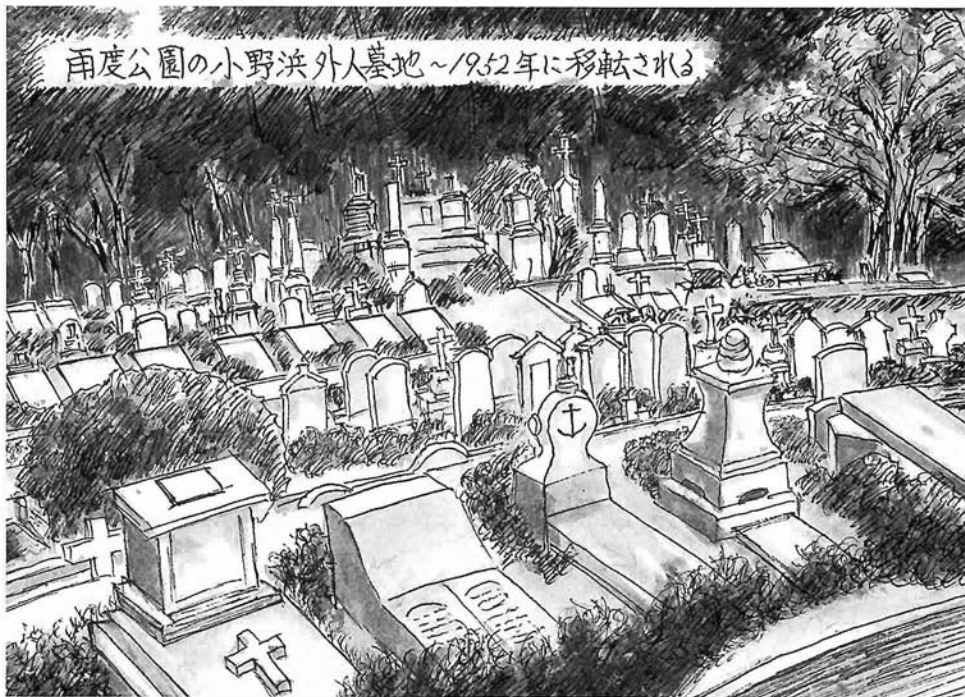
は。信じられない、いや信じたくない。しかし、現実ここに冷たくなってもいい言わなくなったキルビーが横たわっている。

「キルビーサン！」

たまらくなつてハンターが叫ぶ。そして、男泣き。そばに寄ってきた愛子の泣き声がそれにかぶさる。志津の泣き声も。取り囲む従業員たちもこらえきれなくなつて泣き出した。海鳴りよりも激しいみんなの泣き声が怒濤の如く小野浜造船所に満ち満ちた。

小野浜造船所の西に加納湾と呼ばれる小さな入江があった。これは明治四年に私財を投げ打って生田川の付け換え工事を行なった加納宗七にちなんで名づけられたものであるが、その西に運上所が位置し、そこから西一帯に兵庫の港が広がっていた。はるか昔に網屋吉兵衛が小野浜に「船たて場」と呼ばれる木造船の修理場を置いたことはあったが、生田川を付け換えたころは風波を避ける船入り場がなかったことから、加納宗七が入り堀を設けて倉庫も建て、明治六年に加納湾を整備していた。この湾の東に隣接してキルビーが明治十一年に小野浜造船所を設けたのであった。五年の歳月を経過して、まさか、その本人が自殺するとは、誰も予想だに出来ないことであつた。滝善三郎の切腹を最後にして、日本の腹切りは終わったものと世間が思っていた矢先に、外国人のキルビーが拳銃自殺をしたのである。この時代、人が亡くなるとその周辺の地域中にその事実を知らせてまわることが当然の習慣のようになっていたが、まして、キルビーの場合は、思いもかけぬ拳銃自殺であ

再度公園の小野浜外人墓地～1952年に移転される



る。キルビーと縁もゆかりもない人にとつても、関心を持たざるを得ない一大事件である。噂はたちまち、広まった。

こんどろ

紺部村から、大工の留吉が、タネと稲次郎を伴って駆けつけて来た。キルビーが兵庫開港前夜にハンターと共に、この兵庫に乗り込んで来た時、二人に宿を提供し、しばらく、二人が居候させてもらった留吉の家族である。当時、十五歳の少年であった稲次郎が三十過ぎの立派な男性に成長していた。キルビーの遺体のそばに付き添うハンターを見るなり、留吉が駆け寄って言う。

「お久し振りです」

しかし、言葉が続かない。留吉は手で口を覆い、ぐっと込み上げてくるものをこらえる。

「留吉サン・・・」

ハンターも言葉を発せられない。が、顔を見るだけで、気持ちを通じ合う。タネも稲次郎も同じであった。稲次郎は父親と同じ大工となっていたが、米田左門講師の弟子だけに、ただの大工ではおさまらない。学術的に建築の色々なことを勉強して、その知識を応用した建物を実現して世間から一目置かれる存在となっている。

「米田先生にも伝令を送っておきました」

こんな時に至っても、やはりそのない動きを見せるのはさすがである。その米田左門が間もなくやって来た。

「稲次郎、キルビーさんに輿を用意してあげなさい。君は泣いている場合じゃない」

米田の提案に、稲次郎は早速、仲間の協力を取り付けて、白木の柩ひつぎとそれを載せて運ぶ輿を急ごしらえて用意した。キルビーが息を引き取ってから丸一昼夜が経とうとしていた。従業員は言うまでもなく、その家族をはじめ、キルビーの生前、付き合いのあった人たちが次々に集まり、小野浜造船所はキルビーの死を悼む多くの人たちでいっぱいになった。思い思いにたむける線香の煙がたなびいて厳肅げんそうの気が当たり一面に充滿する。

「ハンターさん、キルビーさんに成り代わってあなた、皆さんに挨拶なさい」

米田がアドバイスする。愛子も同じ思いである。

「あなた、ぜひ」

ハンターがキルビーの遺体の横で声を出す。

「皆サン、チョット聞イテ下サイ」

群衆が水を打ったように静まり返る。

「私ハ、キルビーサント一緒ニ永年、働イテキタハンターデス。ダカラ彼ノ気持ガヨク分カリマス。ダノニ、彼ガビジネスノ途中デ、命終ワラセルコト、想像モ出来マセンデシタ。悔シイデス」

ハンターが言いよどむ。群衆の中に改めてすすり泣きが起こる。

「キルビーサンハ、コノ日本ガ好キデシタ。ダカラ、生マレタ国、イギリスヨリモ日本ノ土ニナルコト選ビマシタ」

悲しみが頂点に達する。もはや人目も気にせず、よよと泣きくずれるのは志津である。愛子も泣く。小野浜造船所に多くの人々の泣き声が渦巻く。やがて、稲次郎が用意した柩にキルビーの遺体を従業員たちが入れる。みんなが思い思いにキルビーの死に顔に別れを告げて、柩が輿に載せられる。十数人の男たちが輿を担ぎ上げて、加納湾の北側にある墓地に向けて動き出す。居留地の東南に位置するその墓地は小野浜墓地で、兵庫開港にともなう西洋人居留地が形成されるのと同様に外国人専門の墓地として利用が始まり、西洋人が死ぬとそこに埋葬されるのが決まりのようになっていた。

暮れやすい初冬の夕日が遠く淡路の島影に落ちると、西空に茜色の残照が広がる。小野浜造船所から担ぎ出された輿がゆつくりと西に向かう。提灯行列で数十人が野辺の送り。米田の知り合いの牧師が祈りを捧げて、男たちが掘った穴に柩が入れられ、その上に土をかぶせると、キルビーはこの異国の地で、今、確かに永遠の眠りについたのであった。

「キルビー、グッドラック！」

そのつづやきはハンターが恩人に捧げる次の世での活躍を激励する心からのエールであった。

つづく



■三条杜夫(さんじょうもりお)
フリーアナウンサー、放送作家、ルポライター
を経、放送業界へ。経験にもとく地域活性化
化講師としての活動も評価されている。
著書に「いのち結んで」「玉の道七福神めぐ
り」「そうゆう人たち」など。